

## 【巻頭言】

# 「転移」理解の難しさ・おもしろさ

心理相談センター長 塩山二郎

心理臨床家にとって、転移、逆転移を理解し、それを面接場面でしっかりと応用できるようになるには、10年はかかると言われてきました。それは、この現象が、複雑で、無意識のうちにいろいろ展開されるからと言えます。クライアントの無意識に注意を払い、転移を考え、面接者は、自分が誰に転移されているのかを理解し、面接者の内なる感情に目を向け、転移されたものの中のどの部分に対応するかを瞬時に考えて言葉にすることが求められます。

ある勉強会での出来事ですが、5回の試行カウンセリングの、5回目のテープを聞きました。23歳の男性のクライアントは、50代の女性のセラピストに自分の妹のふがいなさを嘆いていました。姉と妹の3人同胞の家庭です。そういう妹に姉は絶交すると言って、かかわっていませんでした。クライアントは、妹にどのようにかかわったら自分の思いが通じるか熱心に話していました。通じないので、自分も絶交しようかとも言いました。この話の中で、妹のことより、そのことで苦しんでいる母親がかわいそう、と嘆きました。聞き手のセラピストは、まるで、自分がクライアントの母親のような気分になり、わが子に接するような口調で優しくあったかく包み込むように話しました。テープを聞き終えて、ここで何が起きているのかの議論になりましたが、結論として言えるのは、クライアントが、5回で終わる面接を終わりとくなくと切に願っている、別れたくないという思いが暗に語られているということでした。試行カウンセリングの最終回に絶交とか、見捨てるといった言葉が出てくるのです。そういう話題になるのです。クライアントの無意識の中に、セラピストと別れたくないという思いがあるために、別れる、別れないというテーマとして、妹の話題が用意されたものでした。対人関係というものは、かくも見事な展開になるものだと思わされる勉強会でした。この青年にとっては、母親からの自立がさらなるテーマとして残されているということもわかりました。

今号には、昨年度の対人関係セミナーでお話いただいた、京都大学の教授で、精神分析学会の会長でもあられ、個人開業もされている松木邦裕先生の講演録が掲載されています。お読みいただければ、わかりますが、とにかく面白い、わかりやすいお話でした。中身は、当然厄介で、理解するのに骨の折れる問題に違いありませんが、あげられる例がとても理解しやすいものでしたので、会場の皆さんも引き込まれるように聞いておられました。どうぞ、じっくりお読みいただき、転移、逆転移の理解、解釈の仕方などを再度学んでいただければと思います。

昨年、12月26日の全国紙に臨床心理士の国家資格の問題が載りました。3.11の東日本大震災の影響もあるでしょう。社会の方から臨床心理士の有用性が叫ばれるようになっていきます。日本臨床心理士会も、2年目に入る震災支援体制として、文科省のスクールカウンセラー派遣事業の窓口となって、東北3県にカウンセラー派遣の斡旋をしています。未曾有の震災被害を出した東日本大震災は、日本全国の人に喪失体験を与えたり、自らの過去の体験を想起させるほどの心的被害を与えました。私たちの喪失に耐える力とはなんなのでしょうか。誰かとつながっていることが、それを認識することが助けとなるのではないのでしょうか。